



# わたしの聖戦

女性が働くことについて  
医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津恵

169

## ドライバーの未来

高齢者ドライバーによる交通事故が立て続けに起こった。

年齢は70前後から80歳以上まで。皮肉にも、被害者のほとんどが小学生だったり中学生だったり、つまりドライバーより若い世代が犠牲になったことで、報道がさらに白熱した。

高齢者とか認知症とか、あいまいにしてはいけない部分だと思う。

ちなみに、人口学では65歳以上を高齢者と呼ぶ。今や65歳以上は、日本人の27%を占め、80歳以上の人口は1000万人を超えている。少子高齢社会といわれて久しいが、今回続けて起こった交通事故は、高齢社会の現実を如実に映し出した。母数が多ければ事故を起こす人数も増えるのは当たり前で、だからどうするというときに、ドライバーの年齢だけを問題視しているのは解決しない。むしろ、事故が増加することは想像するに難くない。一方、



人口比率でみるとむしろ若年者に事故が多いという事実もある。

飲酒運転が原因となり、3人の幼子の命が奪われる事故があった。川に落ちた車から子どもを救おうとして至らなかつた母親の苦痛に満ちた叫びは、その後飲酒運転の取り締まり強化につながった。しかし、飲酒運転がなくなつたかといえば、残念ながらそうとはいえず、飲酒運転や酒帯び運転は依然として少なくない。

免許証の取得・更新が可能であるため、てんかんやそれに類する病気が原因で起こる事故を100%防ぐのは難しいだろう。車は走る凶器といわれている。トレーニングを受けて常に注意深く運転している分には快適だが、ドライバーに伴う様々な諸問題―飲酒・高齢・病気・気質―などが事故につながるとしたら、事故後にその対処を考えなくてはならない。憎むべきは、人間ではなく、加齢や酒、病気であることを忘れてはならない。しかしだからといって、取り締まりを厳しくすれば済むかといえば、先の飲酒運転に見てとれるように、事はそう簡単ではないのだ。

一見正常に見えることも多く、おぎなりのチェックでどこまでできるのかは未知数である。80歳を超えたら、強制的に免許証を返納させるという意見もあるが、公共の足のない過疎地や職業ドライバーの生活の質に関わることであり、安易には決められない。結局、自主的返納を促すにとどまることになるのだろうか。

産業革命以来、人と機械の関係のあり方についてはときどき取り上げられるが、交通事故ほど身近な問題はない。安全性よりも、利便性や快適性だけを先行して追いかけた結果がここにあることを改めて肝に銘じるべきだろう。

一刻も早い自動運転車の開発が望まれる。それが、若くして命を失くした人々やその家族への供養であり、事故を起こした人にとっての最大の贖罪となるはずだ。

イラスト・伊藤栄章